The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	清華簡『病方』釈読 : 中国医学思想史の再検討
Author(s)	六車, 楓
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2021, 55, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91467
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

清華簡『病方』釈読

――中国医学思想史の再検討――

六車　楓

キーワード：清華簡／『病方』／荊名／中国医学／処方

はじめに

二〇二〇年一二月に新しく公開された『清華大学蔵戦国竹簡（拾）』（黄德寛主編、清華大学出土文献研究与保護中心編、中西書局）には、『病方』という簡潔な処方集が含まれる。清華大学蔵戦国竹簡（以下、清華簡）は楚系文字（楚地域で使われた文字）で書かれていることから、楚簡の可能性が高く、書写年代は、炭素14年代測定により戦国時代中期頃と見られ、『病方』は今まで出土したどの医学関連文献よりも古い。本資料の発見は、先秦の医学思想史を検討するうえで極めて大きな価値を有する。そこで、本稿では『病方』の釈読を行いつつ、その医学思想としての特色について基礎的な検討を加えてみたい。

一、『病方』書誌情報

本章では、『病方』の概要について、『清華大学蔵戦国竹簡（拾）』の整理者（賈連翔氏）がまとめた書誌情報を軸に、論者（六車のこと。以下同様）の見解も交えつつ述べる。

『病方』は時令説文献の『行称』とともに、一冊の竹書に抄録されており、それぞれ筆写者が異なる。篇名は整理者が付けた仮題である。紙幅の都合上、竹書全体の詳細な形制や、内容の全く異なる二篇が同冊にまとめられている理由などについては、拙稿「清華簡『行称』『病方』から見る術数と方技の関係」（『中国研究集刊』第六七号、二〇二一年八月、二八～四九頁）に譲る。

『病方』は全一九簡の竹簡のうち、編聯状況から判断して最多でも第一二簡から第一四簡までの三枚に書かれ、現存するのは後ろの二枚（第一三簡・第一四簡。整理者の附した竹簡番号で言う第二簡・第三簡）である。冒頭の第一二簡は完全に佚しており、論者の見解では、そこに文字が書かれていた可能性も十分にあり得る。前掲の拙稿でも述べたように、整理者は『行称』の最終簡として整理された第一一簡は、篇を区切る空白簡の「隔簡」である可能性を指摘しているが、『行称』の内容からして、文章が第一一簡まで続くことも十分に考えられるため、隔簡の存在を断定することは難しい。仮に『行称』が第一一簡まで記されていたとすると、第一二簡が隔簡である場合も想定されるが、これまで発見された竹書の書式から考えて、その可能性は低いと思われる。『病方』の内容自体は文字の残っている第一三簡・第一四簡で完結しているように見えるが、第一二簡から第一三簡冒頭にかけて文章が続く可能性も捨てきれず、内容の面から考えても、やはり隔簡はない可能性の方が高いのではないだろうか。

簡文は三三字残存しており、病方を三種記している。初めの二種は「肩背疾」と「熱」という病に対する処方で、酒剤を内服する。「肩背疾」はすでに楚地で出土した卜筮祭祷簡にもあり、当時よく見られていた病気の種類であろう。なお、整理者はこの病名を「肩・背疾」と区切って読み、おそらく肩と背中の疾病というふうに、患部が二箇所あると解釈しているが、整理者が触れた卜筮祭祷簡では「肩背疾」と区切らずに一つの病名として理解されるため、本稿でも卜筮祭祷簡の読みに従った。最後の一種は「目疾」で湯剤を外用する。

本篇は、過去に出土した周家台秦簡『病方』、北大秦簡『医方雑抄』、馬王堆帛書『五十二病方』、阜陽漢簡『万物』、老官山漢簡『六十病方』、北大蔵漢代医簡など、いずれの医学関連文献よりも書写年代が古く、中国医薬学史研究において極めて重要な価値を有する。本篇の処方の薬物構成は比較的単純で、対応する疾病もただ簡潔にその病名を記しているだけである。その薬材の多くは識別できないが、それらは馬王堆帛書『五十二病方』の言う「荊名(1)」、すなわち清華簡が書かれた楚地域である荊州で用いられた名称かもしれない。

二、『病方』釈読

本章では、『病方』の原釈文および論者が作成した書き下し文・現代語訳・語注を示す。なお、原文の［ ］は整理者が付けた竹簡番号であり、釈文の【 】は次章の考察における番号と対応する。

《原文》

［一］……［二］【 】瓠濸以酉酓之以瘙肩肯疾」昔濸之以酉酓之以瘙慹」忍目［三］濸以瀀目疾虞以冥之■

《釈文》

……𐀀壺【1】煮以酒、飲之【2】、以瘥肩背疾【3】。藉煮之以酒、飲之、以瘥懇【4】。恚目【5】煮以澡【6】目疾、且以煖之【7】。

《書き下し文》

……𐀀壺煮るに酒を以てし、之を飲みて、以て肩背疾を瘥ゆ。藉之を煮るに酒を以てし、之を飲みて、以て懇を瘥ゆ。恚目煮て以て目疾を澡い、且く以て之を煖む。

《現代語訳》

……𐀀瓠を煮るのに酒を用い、これを飲んで、肩背疾（心痛症）を治す。草の敷物を煮るのに酒を用い、これを飲んで、懇（身体の動かない病）を治す。目を見張ったような実を煮て目疾（の患部）を洗い、しばらくその（患部）を温める。

三、考察

本章では、前章での釈読を踏まえ、整理者の注（以下では「原注」と表記する）を参照しながら、釈文で示した【】の番号順に内容を検討する。

【1：𐀀壺】一文字目の「𐀀」は不明文字。二文字目の「瓢」は「壺」字に読み替え、「瓠」と解釈する。

原注一は、「𐀀は、新しく見えた文字で、不明である。瓢は信陽長台関一号楚墓遣策2-01・2-011に見え、董珊氏は従豊瓜声であると分析しており、これも「瓠」と読める。𐀀瓠は、植物類の薬名であろう。一説には瓜蔞〔論者

注：キカラスウリ」を指し、主治は背癰である」と注する。

また、ユーザー名「潘灯」氏は、[2]「[illegible]」字の下部が「它」字に対応し、「蛇」に関わる文字と見なし、この薬物を蛇類と関係のあるものとする。また、二文字目の字形については「斷」字の可能性も排除できないと述べ、右の部分は楚簡の「瓜」字とほど遠く、単に字形上から見ると、かえって「匕」字に似ていると指摘する。そしてこれは、「斤」字の訛省形であるかもしれないとする。「潘灯」氏は、この二文字を続けて読んで一つの薬物名と理解する可能性も認めつつ、上記のように区切って「蛇薬をいくつかにたたき切って煮た酒を飲んで病を治す」と解釈する。

右に挙げた注釈には検討の余地がある。まず「[illegible]」字については、確かに「潘灯」氏の述べるとおり字形は「它」字に近いが、うかんむりが楚文字の特徴とやや異なるように見受けられる。原文を見ると、「它」字でいううかんむりの左右が丸まっているが、特に右側に注目すると、一画ではなく二画で書いていることが分かる。これを踏まえると、この文字はうかんむりではなく、あなかんむりを有する文字である可能性はないだろうか。例えば、郭店楚簡『窮達以時』第一〇簡の「空（穴）」字は原文において「[illegible]」と書かれており、うかんむりの先が丸まっているような形であり、「[illegible]」字にも近い。ただし、「穴」字の場合は根元の方から「八」の部分を書き始めるのが基本であり、うかんむりの先の方から点で書き表されている「[illegible]」字と同一視してよいのかは疑問が残る。いずれにしてもこの文字は判然としないため、現時点では不明文字として扱う。

次に二文字目「[illegible]」については、原注一で挙げられた董珊氏の説を見ると、原文を隷定した「[illegible]」字を、「壺」字に読み替えている。[3]董珊氏は、「[illegible]」字を瓜声に従って「壺」字で読み、「[illegible]」を意符と見なしており、この説に従って本稿では「壺」とした。その上で、これを原注と同じく「瓠」と解釈するのは、『詩』豳風・七月の「八月壺を断つ（八月斷壺）」に対する「壺、瓠也」という毛伝と、『楚辞』招魂の「赤蟻は象の若く、玄蠭は壺の若し（赤蟻若

象、玄蠭若壺些）」に対する「壺、乾瓠也」という王逸注に従うことによる。『本草綱目』菜之三・壺廬の釈名にも「古人は壺・瓠・匏の三名皆な通称すべし、初め分別すること無し（古人壺・瓠・匏三名皆可通稱、初無分別）」とある。『病方』のこの薬名が具体的に何を指すのかは判然としないが、対応する病名からして、原注と同じく栝樓（キカラスウリ）と判断した。『金匱要略』胸痺心痛短気病脈証治には、「胸痺にて臥すを得ず、心痛背を徹する者は、栝蔞薤白半夏湯之を主る（胸痺不得臥、心痛徹背者、栝蔞薤白半夏湯主之）」とあり、栝樓を胸痺の治療に用いる。この「胸痺」は胸部が締め付けられるような痛みを感じるもので、現代で言う狭心症や心筋梗塞に相当し、[4]『病方』後文の「肩背疾」に類する（詳細は【3】を参照）。さらに、『詩』豳風・東山の「果蠃の実、亦た宇に施ぶ（果蠃之實、亦施于宇）」に対し、毛伝が「果蠃、栝樓也」と述べていることからも、古代の人々にとって栝樓は身近な植物であったと推測できる。

ただ、『方言』巻一一には「蠭は、燕趙の間之を蠓蜰と謂う。……其の大にして蜜あるは之を壺蠭と謂う（蠭、燕趙之間謂之蠓蜰。……其大而蜜謂之壺蠭）」とあり、この「壺蠭」は『本草綱目』虫之一において、スズメバチ科キボシアシナガバチである大黄蜂に同定される。[5]李時珍は『本草綱目』大黄蜂の釈名で、前出の『楚辞』招魂に見える「玄蠭」も大黄蜂に当たるとする。これらと『楚辞』招魂でハチの形を「壺」と形容していたことと合わせると、楚の方言でもその見た目から、「壺」という文字を用いて何らかの種類のハチを別称で呼んでいた可能性もあろう。『名医別録』上品・蜂子には「大黄蜂子。心腹の脹満痛を主治し、身を軽くし、気を益す（大黄蜂子。主治心腹脹滿痛、輕身、益氣）」とあり、この「心腹の脹満痛」という症状は『素問』蔵気法時論の言う「心病」の「虚すれば則ち胸腹大たる（虚則胸腹大）」という症状に類する。もし、整理者の指摘するとおり、『病方』記載の薬名が楚地の方言を反映し、なおかつ「壺」がハチのことを指すのであれば、この記述は「肩背疾」、つまり心痛症に対する蜂を用いた

処方として理解できる。しかし、楚独特の呼称を確認し得ない以上、本稿では過度な読み替えはせずに『詩』や『楚辞』に従って、原義のまま「瓠」の処方と見なす。

一つ注意が必要であるのは、ここまでの説は全て第二簡の冒頭から文章が始まることを前提としている点である。欠簡の第一簡から文章が続く可能性も十分にあり得るため、冒頭の二文字を薬名と断定するには慎重を期する。

仮に第一簡から文章が続くとすれば、「壺」を文字通り容器の壺として解釈し、「[illegible]」字は壺の形や素材を表す修飾語、あるいは「壺を○○する」というような動詞として理解できる。『本草綱目』虫之一・原蠶沙（蚕の糞）の「月経久閉」の附方には「蠶沙四両、砂鍋もて半黄色に炒り、無灰酒一壺に入れ、煑沸し、澄して沙を去り、温服する毎に一盞をもってすれば即ち通ず（蠶沙四兩、砂鍋炒半黄色、入無灰酒一壺、煑沸、澄去沙、毎温服一盞即通）」とあり、煮込むための容器として壺が用いられている。これに鑑みると、複数の薬を酒の入った壺に入れ、それを火にかけるという調剤方法を記している可能性もあるのではないだろうか。煮込むこと自体は『病方』の記述からも明らかなとおり、極めて一般的なものであり、それに容器が必要なことは自明である。

ただ、本文が第一簡から続くかどうかは、同冊の『行称』第一一簡が空白の隔簡であるか否かに左右されるため、この説は推測の域を出ない。後文の処方の書き方からすれば、冒頭の二文字を薬名とするのが書式の統一もなされているように見える。

【2：煮以酒、飲之】原注一は「濄」字を「煮」字の異体字とする。また、原注はこの部分について、馬王堆帛書『五十二病方』癃（小便排出が難しくなる種々の病）にも「一、蠃牛二七・薤一槀を取り、并わせて酒を以て煮て之を飲む（一、取蠃（蠃）牛二七・蟹（薤）一扞（槀）、并以酒煮而歙（飲）之）」と同様の表現があると述べる。確かに原注の指摘するとおり、酒で薬物を煮込み、それを飲むという記述は、『五十二病方』に散見される。

「酉」字を「酒」字に読み替える例は、清華簡『厚父』第一三簡に「曰く酒は食に非ず、惟だ神の饗なるのみ（曰酉（酒）非飤（食）、隹（惟）神之卿（饗））」とある。そもそも「酉」字は甲骨文で「𠙵」[6]となっており、これは酒樽・酒壺の形象である。『説文解字』酉部には、「酉は、就なり。八月黍成り、酎酒為るべし。古文の酉の形に象る（酉、就也。八月黍成、可爲酎酒。象古文酉之形）」とある。

【3：以瘥肩背疾】「瘥」字は原注二の指摘するとおり、従疒虘声であって、包山楚簡などの楚の卜筮祭祷簡によく見え、「瘥」と読む。『説文解字』疒部には「瘥は、瘉ゆるなり（瘥、瘉也）」とあり、癒えることである。

また、原注は「肩背疾」を「肩・背疾」と二つの病に分けて読むが、原注が用例として掲げた葛陵楚簡（書写年代は前三九八年）乙四第六一簡は「……其の肩背疾を以て■[7]（……以其敻（肩）伓（背）疾■）」と釈読され、一つの病名として考えられている。「肩背」という語は伝世文献にも多数見られ、例えば『素問』金匱真言論には「秋気なる者は病肩背に在り（秋氣者病在肩背）」とある。宋華強氏は、葛陵楚簡の他の箇所に「……背膺疾は、瘍脹・心悶するを以て、卒するに歳或いは至■（……伓（背）膺疾、以痒（胖）瘍（脹）・心念（悶）、𠦪（卒）戠（歳）或至■）」（零第五八四簡、甲三第二六六・二七七簡）、「■貞う、既に背膺疾にして、以て胛疾■（■貞、既𠦪（背）䏚（膺）疾、以䏚（胛）疾■）」（乙四第八簡）などとあることと、『素問』蔵気法時論に「心病は、胸中痛み、脇支満ち、脇下痛み、膺・背・肩甲の間痛み、両臂の内痛む。虚すれば則ち胸腹大たりて、脇下と腰と相い引きて痛む（心病者、胸中痛、脇支滿、脇下痛、膺・背・肩甲間痛、兩臂内痛、虚則胸腹大、脇下與腰相引而痛）」とあることを根拠に、「肩背疾」を心痛症に同定する[8]。また、張光裕・陳偉武両氏も、楚簡では「背疾」と「膺疾」を合わせて「背膺疾」と呼び、あるいはそのように併称した上で「胛疾」と同一視すると述べて、背・胸・肩の結びつきを指摘する[9]。なお、「肩背疾」の「敻」字を「肩」字で読むべきかについては数々の議論がなされ、両氏はこれを筋骨の結節

箇所を意味する「縈」字で読み、当該文字が「肩」字の誤字であるかどうかは分からないとする。[10] しかしながら、「肩背疾」と明記されている『病方』が発見された今、戦国時代には「肩背疾」という病名が用いられていたことが改めて分かり、葛陵楚簡の「敺」字を「肩」字と読む説がより強化されたと考えられる。

【4：藉煮之以酒、飲之、以瘥慹】「菩」字は「藉」と読み、「草の敷物」の意味。この文字について、原注三は従艸昔声の漢字と見なし、植物類の薬名であるとし、一説では「酢」と読むと述べる。確かに「酢」字は「昔」字と同じ鐸部であるため、読み替え自体は可能である。しかし、馬王堆帛書『養生方』や『五十二病方』で、「酢」は「措」字と表記されることに鑑みると、液体の酢を、なぜ『病方』では『養生方』などのようにさんずいではなく、くさかんむりで記したのかが判然としない。あるいは、「酢」字で解釈するとすれば、これを酢そのものではなく、酢のように酸味のある植物と考えて、『神農本草経』中品で「味酸」とされる酸漿（ホオズキ）と考えられるかもしれない。同書によれば、これは「荊楚川澤」に生えており、この生育地は清華簡が楚系文字で書かれていることと一致する。

ただ、本稿では「昔」字と同じ鐸部の「藉」字に読み替えた。このように読み替える例は、睡虎地秦簡『日書』甲種・詰に「人故毋くして鬼其の宮を藉む（人毋故鬼昔（藉）其宮）」とある。『病方』の原文ではくさかんむりが明記されており、「藉」字の「草で編まれた敷物」という原義にも合致する。

敷物を用いる処方は出土文献と伝世文献の両方に散見される。まず、出土文献では馬王堆帛書『胎産書』に「・字むこと已めば、即ち其の蓐を燔き、水中に置き、以て嬰児を浴せしむれば、疕瘙せず。・嬰児の已に浴する所の者の水半杯を取りて母に飲ましむれば、母も亦た余病毋し。（・字者已（已）、即燔其蓐、置水中、以浴[11]嬰兒、不疕騷（瘙）。・及取嬰兒所已（已）浴者水半栝（杯）歙母〓（母、母）亦毋餘病）」とある。「疕」とは、『説文解字』疒部に「頭瘍なり（頭瘍也）」とあるとおり、頭のできものを指し、「瘙」はかさのことで、この処方は敷物の「蓐」の灰を

外用するものである。また、『五十二病方』諸傷には「一、傷者をして痛み毋く、血出ずること毋からしむるに、故き蒲席を取りて厭え□□□燔き□□□□痟（一、令傷者毋痛、毋血出、取故蒲席厭（厭）□【□□】[12]燔□【□□□】肩（痟））」とあり、これも敷物の「蒲席」を燃やして外用する。一方、伝世文献の『太平聖恵方』巻四七・治霍乱欲死諸方に「治霍乱転筋垂死、立效方」として、「故蒲一握り細く切る。右漿水一大盞を以て、煮て六分を取り、滓を去る。温温として頻に服す（故蒲一握細切。右以漿水一大盞煮取六分、去滓。温温頻服）」と述べる。この「蒲」も敷物のことであり、ここではそれを単に煮込み、煮汁を内服している。『病方』の処方もこの『太平聖恵方』と同じく、敷物の煮汁を内服するものであろう。

また、句末の「熟」は、『荘子』田子方に「熟然として人に非ざるに似たり（熟然似非人）」とあり、『経典釈文』は「司馬云わく、動かざるの貌なり（司馬云、不動貌）」という説を引くことから、身体の動かない病気と解釈した。この病の詳細は不明であるが、前に引いた『太平聖恵方』治霍乱転筋垂死立效方の「転筋」は筋肉の硬直、ひきつり、痙攣を意味し、下肢のこむらがえりを指す場合が多く、[13]これに鑑みると、『病方』の「熟」も転筋に類する病かもしれない。なお、原注三は『説文解字』心部の「熟は、晡れるなり（熟、晡也）」を引いて、恐れると解釈する。段玉裁は『説文解字注』でこの文字に対し、『荘子』斉物論の「喜怒哀樂、慮嘆變熟」という記述を挙げる。「恐れる」と解釈しても文意は通るが、本稿では『太平聖恵方』の記述との類似性に着目し、身体が動かない病気の意味で訳出した。

【5：恚目】「恚目」は目を見張ったような実。「忍」字は原注四が述べるとおり、従心又（規）声で、見母支部の文字である。ここから論者は同じ支部に属する「恚」に読み替えた。このように読み替えられる可能性は、「汗天山」氏[14]の指摘どおりだが、具体的に何を指すのかは断定しがたい。この言葉の用例として、「汗天山」氏は『管子』地員

の「恚目、其葉若苑」を挙げるが、『管子』においても「恚目」が何のことであるか、解釈が未だ確定していない。『管子集校』では任林圃氏が『爾雅』釈草の「苻、鬼目」およびその郭璞注の「今江東に鬼目草有り、茎は葛に似たり、葉は員にして毛あり、子は耳璫の如きなり。赤色にして叢生す（今江東有鬼目草、莖似葛、葉員而毛、子如耳璫也。赤色叢生）」という記述から、これを「恚目は、其の葉宛の若し」と読んで「鬼目の葉は、紫苑のようである」と解する。この説に従えば、『病方』の当該記述も鬼目のことを指していると考えられる。鬼目の名は『本草綱目』草之七に白英（ヒヨドリジョウゴ）の実として見え、李時珍の引く『名医別録』では、この主治が「明目」、つまり目をよく見えるようにするとされている。この効能からすると、『病方』で鬼目が「目疾」の治療に用いられることは理に適う。ただ、この任氏の説は、「恚目」を江東で言う「鬼目草」に同定できる理由が判然としないため、これだけを根拠に『管子』および『病方』の「恚目」を鬼目と読み替えるのはやや早計に思われる。

そもそも、『管子』のこの部分は、「恚目は、穀実の怒り開くを謂うなり（恚目、謂穀實怒開也）」という尹知章注により、従来、前文の「其種櫑葛、赩莖黄秀」と一続きの文章であると考えて「其種は櫑葛なり、赩茎黄秀、恚目なり。其の葉は苑の若し」と解釈され、櫑葛はイネ科の植物とされてきた。つまり、櫑葛の実が張り裂けそうなほどに大きく実っているさまを述べたものとされてきたのである。これに対し、原宗子氏は、櫑葛をイネ科の植物としては地員篇の他のイネ科植物に関する記述と齟齬を来すとし、これをヤマイモと考えて、「恚目」がヤマイモのむかごである可能性を指摘した。[15] だが、ここでも「恚目」はむかごの目を見張ったような大きさを形容したものであり、尹知章注と同じく、植物の見た目を表す原義を活かして解釈している。これを踏まえると、『病方』の当該記述も鬼目という固有名詞に言い換えられる可能性のみならず、植物の見た目をただ言い表しただけの可能性も考えられる。それがいわゆる荊名であるかどうかは判断が難しい。本稿では、ひとまず「目を見張ったような実」とだけ解釈してお

く。

【6：澡】原注四は、「澡」字を心母宵部の文字とし、精母宵部の「澡」字と読んで「洗う」の意味とする。原注四の指摘どおり、患部を洗う記述には、『五十二病方』諸傷の「一、消石を温湯中に置きて、以て癰を洒う（一、稍（消）石直（置）温湯中、以洒（洒）癰）」や、阜陽漢簡『万物』[16]の「□寒水を以て目盲を洒うなり（□以寒水洒目盲也）」などがある。

【7：且以煖之】整理者に従って「虞」字を「且」字と読む。「tuonan」氏[17]は「瘥」字に読めるとし、「潘灯」氏[18]もこれに従って、整理者釈文と文章の切り方を変えて「目疾瘥、以……」と解するが、前文で二度使われた「瘳」にはやまいだれが付いているにもかかわらず、当該文字には付いていないことを考えると、筆写者は両字を使い分けていたように思われる。よって、本稿では整理者に従う。

また、「煖」は温めること。原注五は「熹」字を従火宮声の文字とする。そして、「宮」字は上博楚簡『緇衣』第六簡などに見え、伝世本では影母元部の「怨」字がこれに対応するという。これを根拠に、整理者は匣母元部の「緩」字に読み替えて、「穏やかになる」の意味でとっている。しかしながら、この解釈には異論が多い。例えば「汗天山」氏[19]は、整理者の隷定が誤りでないとすれば「熹」字をまず「焥」字に読み替える。その上で、整理者が韻部の同じ匣母元部の「緩」字と読むこと自体は古音の観点からすれば問題ないとするが、「穏やかになる」の意味では文意が適切でないと指摘する。そしてこれを踏まえ、「焥」字を「温める」という意味の「煖」字で理解する場合と、「明らか」という意味の「煥」字で理解する場合の二パターンを提示し、「煖」字ならば治療方法に関する記述として、「煥」字ならば薬の効果に関する記述として解釈できると述べる。論者も「汗天山」氏の指摘に賛同し、本稿では「熹」字を「焥」字と読み替え、「煖」字で理解する説を採用する。「tuonan」氏[20]は「熹」字を「熨」字と読み、薬を

用いる方法の一種である温罨法ではないかと指摘するが、思うに「煖」字もそれに近い治療法ではないだろうか。「煖」の原義は温めることであり、ここでは温める際に恚目の煮汁を用いているのか不明であるが、恚目の温かい煮汁を利用するとすれば、布に汁を染みこませるか、熱を通す容器に入れてそれを目に当てるなどの方法が想起され、これらは温罨法と言えよう。『五十二病方』傷痙（外傷から生じた痙攣性の病。破傷風の類）には、炒った塩を布で包み、頭に当て布をしてその上から押し当てるという温罨法が見える。『病方』の「冥」字を「煖」字と読み替えて温罨法として解釈できるのであれば、戦国時代中期頃にはすでに温罨法が行われていたことになる。ただ、温罨法を示す言葉は『五十二病方』などでは「熨」となっており、この点は考察の余地がある。

おわりに

釈読により、整理者の指摘どおり、本篇に見える薬名は、伝世の本草書や医書に登場するものと異なり、荊名である可能性が高いことを確認できた。しかし、呼称に地域性が強く表れている一方で、その調剤方法は酒剤と湯剤といった、他の医書にも散見される一般的なものであった。特に酒剤の記述は、丸山敏秋氏[21]が指摘するような、治療の担い手の中心が祈祷を行う巫から、酒を薬として用いる醫（医）へと移行しつつあったという先秦の状況と合致するかもしれない。ただ、周策縱氏[22]は巫術により治療を行う巫医が酒を用いた可能性を指摘しているため、『病方』に酒の記述が見えるからと言って、医の文献であると断定することは早計であろう。この他、酒剤が内服され、湯剤が外用されるという点も興味深い。これらについては、別稿で改めて論じたい。

［注］

（1）『五十二病方』牝痔に「葭は、荊名に盧茹と曰う（葭者、荊名曰盧茹）」とある。
（2）簡帛網・簡帛研読「清華十《病方》初読」（二〇一〇年二月二三日発表。http://www.bsm.org.cn/forum/forum.php?mod=viewthread&tid=12635）
（3）董珊「信陽楚墓遣策所記的陶壺和木壺」（武漢大学簡帛研究中心主辦『簡帛』第三輯、上海世紀出版・上海古籍出版社、二〇〇八年一〇月、三五頁）。
（4）佐々木賢二『金匱要略を読み解く』（たにぐち書店、二〇一八年、三二一頁）。
（5）鈴木真海訳、木村康一ほか新注校定『新注校定国訳本草綱目』第一〇冊（春陽堂書店、一九七六年、八七頁補注）。
（6）画像は『甲骨文合集』による。
（7）■は竹簡の欠損などにより、書かれている字数が不明であることを表す。以下同様。葛陵楚簡の釈文は、武漢大学簡帛研究中心・河南省文物考古研究所編著『楚地出土戦国簡冊合集（二）葛陵楚墓竹簡・長台関楚墓竹簡』（文物出版社、二〇一三年）による。
（8）宋華強「由新蔡簡〝肩背疾〟説到平夜君成所患有心痛症」（『新蔡葛陵楚簡初探』武漢大学出版社、二〇一〇年、三一五～三二四頁）。
（9）張光裕・陳偉武「戦国楚簡所見病名輯証」（『中国文学学報』第一輯、二〇〇六年一二月、八四頁）。
（10）注9前掲論文、九〇頁。
（11）裘錫圭主編、湖南省博物館・復旦大学出土文献与古文字研究中心編纂『長沙馬王堆漢墓簡帛集成（陸）』（中華書局、二〇一四年、九八頁）は「水中」と「嬰兒」の間に不明文字が二字あるとするが、馬継興『馬王堆古医書考釈』（湖南科学技術出版社、一九九二年、八一二頁）に従って「以浴」を補う。
（12）□は判読が不明な文字。【】は帛書が破れて文字自体は確認できないが、一行の字数や文脈などから推定して整理者が挿入したことを示す。「厭」字の後の欠損する三文字を裘錫圭主編、湖南省博物館・復旦大学出土文献与古文字研究中心編纂『長沙

馬王堆漢墓簡帛集成（伍）』（中華書局、二〇一四年、二一七頁）は「□□【□】」とするが、写真を見ると文字の一部が残っているのは一文字目だけで、後の二文字は完全に帛書が欠けている。よって、本稿では「□【□□】」と表記した。ただし、帛書全体の文字の大きさから考えて、「厭」字と「燔」字の間に三字入ることには変わりない。

（13）注4前掲書、六七二頁。

（14）注2前掲サイト、二〇二一年一月八日発表。

（15）原宗子「種えつけるもの――粮食」（『古代中国の開発と環境：『管子』地員篇研究』研文出版、一九九四年、一七八～二二一頁）。

（16）底本は、文化部古文献研究室・安徽阜陽地区博物館阜陽漢簡整理組「阜陽漢簡《万物》」（『文物』一九八八年第四期、三六～四七・五四・九九頁）。

（17）注2前掲サイト、二〇二〇年一一月二二日発表。

（18）注2前掲サイト、二〇二〇年一一月二二日発表。

（19）注2前掲サイト、二〇二〇年一二月二八日発表。

（20）注2前掲サイト、二〇二〇年一二月一四日発表。

（21）丸山敏秋「呪術から医術へ」（『黄帝内経と中国古代医学：その形成と思想的背景および特質』東京美術、一九八八年、一一一～一五三頁）。

（22）周策縦「巫医与針灸、医酒、及其他治療術」（『古巫医与「六詩」考：中国浪漫文学探源』聯経出版、一九八六年、一〇五～一一六頁）。

［参考文献］

・増淵法之『日本中国植物名比較対照辞典』（東方書店、一九八八年）

・小曽戸洋・長谷部英一・町泉寿郎著、馬王堆出土文献訳注叢書編集委員会編『五十二病方』（東方書店、二〇〇七年）

［附記］

本稿は JSPS 科研費 21J10152 の助成を受けたものである。

（大学院博士後期課程学生・日本学術振興会特別研究員 DC2）

摘要

清华简《病方》初探

—中国医学思想史再考—

六车 枫

清华简第十册《病方》是记述了关于“肩背疾”“熱”“目疾”三种疾病的药方。简文中的药名和传世医书上出现的药名不同。可能是所谓的楚国的“荆名”。药物的称呼虽然表现了地域性，但是以酒或水煮药物之后内服或外用这个调剂法、服用法就是其他医书中也常见的酒剂和汤剂。

本篇的抄写年代是战国时期的中期，是至今出土的医书之中最早的文献。因此通过本篇我们可以追溯探讨中国医学历史。